

訳者前書き

日本人のスポーツ選手が米国のベースボール・リーグや欧州のサッカー・リーグの第一線で活躍し始めて久しく、スペースシャトルの乗組員の一部を日本を含め世界各地から集めるようになって早20年が経つ。高度な職能あるいはその素養を持つ人々は国境にとらわれずに雇用機会を掴めるようになり、また、自己の専門性を高めるために国境にとらわれずに鍛錬の場を見つけるられるようになった。このような傾向は、芸術やエンターテインメント、ゲーム、フード、医療、学際ならびに研究所など様々な経済分野に広がっている。訳者の職場であるNY市立大学の教職員や学生の顔ぶれを見ても例外ではない。もはや職業の選択、雇用者の選択、そして事業の設立がボーダレスになろうとし、市場のグローバリゼーションも急速に進みつつある。これらの状況は今後どの方向に、どのように進展するのであろうか。

この問いに正面から応じ、答えるためのビジョンを与えるのが本書である。本書は、訳者の職場の同僚であり長年の友人でもあるアビ・モーシュウィッツ博士による2002年の著書を翻訳したものである。モーシュウィッツ博士は三十年ほど前に「仮想組織」という言葉を生み出した識者の一人として知られ、この分野は彼のライフワークである。「仮想」という用語は想像上とか架空性という面の響きが強いせいか、例えば「仮想敵国」などのように仮想に作られた対象の方に注意が向けられがちである。科学的に仮想機構が多く取りざたされるのはコンピュータの分野であって、仮想メモリーや仮想リアリティーなどの用語が一般に良く知られている。この仮想性は物理的に困難な状態をいかにその物理的な条件の範囲内で打破するかという工学的な仕組みを意図するのであって、想像とか架空などとは対極に位置する概念で、まさに現実を具体的に処理するものである。本書で定義される「仮想組織」もそのように捉えてもらいたい。

仮想組織は、情報技術を活用し目標指向型の活動をする組織を生み出す経営概念であって、架空の組織や特定の様式の組織の構築を目指すものではない。目標志向であるが故に企業内で発生する多様な需要に企業内あるいは外部からの供給で速やかに対応せねばならず、最適化を図るとなると組織に動的な変化が絶えず生じる。この変化に強い組織とはどのようなものかを本書は一貫した理論で言及し、いくつかの例を含め様々な角度から分析しており、読者、とくに経営層で活躍される諸氏にはきっと将来の国際経営術を洞察するための一助となると確信する。近い将来、仮想組織が経営のパラダイムとして浸透すると、冒頭で述べたボーダレスの雇用機会と市場のグローバリゼーションが一段と進行し、所得格差や富の偏りのみならず、政府の民営化や多国籍仮想企業の台頭による国家への挑戦にも拍車がかかるであろう。これらはすでに始まっているかもしれない。

むしろ本書の論点は、仮想組織の進展に伴う国家の枠組みや核家族制度の崩壊の必然性であって、モーシュウィッツ博士の最も造詣の深い分野を集大成して展開される論議はきっと多くの読者の共感を呼ぶと思われる。未来の動向を予測することは難しい。しかし、占いが主題ではなく、中世から近世にわたる社会・経済制度の遷移の考察に、近代に見られる技術進歩の速度を折り合わせて外挿し、次世代の姿の捉え方を説くもので、論旨の組み立ては健全である。我々は情報化社会に生きており、企業経営者は常に一歩先を見なければならぬ。果たしてこれからの情報技術の発展が正として働くのか負として働くのか、その答えを楽しみに読み進めていただきたい。ちなみにモーシュウィッツ博士はもともと数学を専攻し、グラフ理論をもとに政治原理や経済活動を分析したり、コンピュータの倫理面での学問体系、デジタル化社会の政策論などにも取り組んでいる。

翻訳作業への取組みは、三菱コンピュータ・コミュニケーション研究会でのモーシュウィッツ博士の講演を企画した2003年に始まった。翻訳作業の大半は2004年夏からの英国滞在中に行われ、原文の意図を崩さぬよう忠実な日本語化に心がけたが、誤訳や不明瞭な部分は訳者の責任であり速やかに改定する所存である。本書の発行にあたり、宮崎征一氏をはじめとする三菱コンピュータ・コミュニケーション研究会の諸氏、英国アシュリッジ・ビジネススクール学長のカイ・ピーターズ教授、同校ディレクターのフィオナ・デント教授、また、翻訳の一部を手伝ってくれたNY市立大学の佐藤奈己および宮地真理佳の学生二人に心から謝意を表す。

